

## 大会コントローラー報告

大会コントローラー 大西 淳一  
同補佐 落台 公也、吉村 充功

### 1. 大会コントローラー活動報告

実施規則第 32 条に規定されている任務のうち、おもに実施したものについて項目だけ列挙する。3 人で分担して実施した。

トレインの適格性（地図調査前の下見）

スタート・ゴール等のレイアウト決定前の助言、当日の現地確認

地図の規定（ISOM2000 適用の確認）

コース内容（試走会・OCAD ファイルでの確認）

報道関係者・観客等に対する処遇（立入禁止範囲の確認、報道関係者の対応）

コントロール設置状態（設置後の現地確認、モデルイベントを含む）

式典（非シード抽選方法の確認、表彰式進行、方法の提言）

コース分割・組合せ（位置説明・パターン表の確認、抽選方法の指導）

幹事会・理事会・技術委員会との調整（実施規則不適用条項の承認、海外選手の競技条件など）

### 2 競技全般を振り返って（吉村）

#### [ 1 ] 地図について

##### 精度

今回の地図は、クラシック・リレーとも山川氏を初めとする調査者の尽力により、一般クフスを含め、例年以上に精度の高い地図が提供されている。特に、後述するように、調査最終段階での精度の向上が、各コースにおける優勝時間短縮につながっている。また、精度の高い地図が提供されたため、公正なレース環境が提供され、レース結果にも反映されている。このような精度の地図を提供し続けるためには、学連総会等で提示されているように、より多くの参加者が確保できなければ、維持できない。今回のような精度の地図をインカレで用意すべきかどうかは学連加盟員の意識によって左右される問題である。また、実行委員会には尽力いただいたが、実際には初期の時点では調査人数も少なく、プロ調査者を動員しなければ、精度の維持どころか、まともな地図を提供することが困難な状況であったと考えられる。これは今回のインカレに限らず、全国的な調査者不足の問題であり、今回のインカレの継続を考えれば、この点にも積極的な解決策を模索すべきである。

##### リレーの地図は 1:10,000

本インカレでは、初めてクラシックとリレーで異なる縮尺の地図を採用した。これは、世界的に、リレー競技が 1:1000 の地図、クラシック競技が 1:15,000 の地図を使用することが主流となっていることによる。また、リレーのトレインの性質から、1:10,000 の縮尺を用

いることが、地国の読みやすさ等の観点から望ましいと判断した。今回は実施規則の不適用により対応したが、この点については直後の総会で規則の改正が行われたため、今後、トレインの性質を鑑みて、リレーにおいては 1:10,000 と 1:15,000 が使い分けられることになる。

#### モデルイベント地図

クラシックとリレーで異なる 2 種類の縮尺の地図を使用したため、モデルイベントでは、選手の利益の観点から、2 種類の地図が提供されている。今後も、このようなケースでは、改正規則によるとおり、できる限り 2 種類の地図が提供されるべきであろう。ただし、参加者数の減少により収入減となった場合には、無理に 2 種類の地図を提供する必要はないかもしれない。

#### 地図記号

IOF が 2000 年 6 月に発行した最新の ISOM2000 により、調査・作図されている。これまで日本で慣習的に使われてきた間違っただ記号の使われ方についてもほぼ解消されている（詳しくはインカレガイド 2000 参照）。また、極力特殊記号は用いずに作図されている。今後、外国人学生の参加等、国際的観点から、以上の点は積極的に維持していく必要がある。

#### [2]コース・優勝時間設定について

##### 全体的な特徴

クラシック、リレーとも、ウィニングタイムを除いてはコース難易度、コントロール位置など適切なコースが提供されている。特に、日本のレースでは、運営の都合による意味のない誘導が多すぎるが、今回、変な誘導のないコースが提供されたことは特徴的である。リレーにおけるパブリックコントロール後のレッグなどがそのよい例である。なお、現在の選手権の枠組みでは、今回の難易度程度が適当であるが、より選手権の意味合いを強め、枠組みの変更がなされるなら、もう少し難易度を上げることも可能であると考えられる。

##### クラシック優勝設定時間

男子、女子ともに規定の優勝時間に対して大幅に短目となった。コースの長さが適切かどうかは、コントローラー業務の範疇であり、十分にコントロールできなかったことは非常に申し訳なく思う。特に、トップレベルの選手にとって、70 分と 80 分ではレースに対する準備が少なからず違い、また、実際のレースで要求されることも違うと考えられる。当初、男子 78～80 分、女子 63～65 分程度になるようにコース設定を実行委員会にはお願いした。これは、優勝設定を超えるレースとなった場合の多くが我慢比べになる傾向が高く、オリエンテーリングとしての競技性を損なわないための措置である。

ここでは、適切な長さにコントロールできなかつたと考えられる要因を示す。1) 試走人数が少なく、タイムの信頼性が高くならなかつたこと、2) コース確定後の最終地図調査で、細部にわたって格段に地図精度が向上したこと（男子コースはベストルートが変更になったレグがある）、3) テレインの制約からこれ以上距離を伸ばすには、コース回しを抜本的に変更せざるを得なかつたこと、4) 選手のレベルを過小評価しすぎたこと、が主な要因である。1) の試走要員の確保は関東以外で行われるインカレでは慢性的な問題であり、例えば、卒業 1、2 年目の OB・OG が積極的に関わるような環境づくり、スコードとの連携などシステムづくりが必要である。2) は地図業者である山川氏の画張りによるところが大きい。実際にはこの修正で、トップ選手でも 3 分程度の時間短縮効果があったと考えられる。3) の理由により、そもそもウィニングタイムが短くなること（男子最短 75 分、女子 60 分）はやむなしと判断していた。しかし、4) の選手のレベルを読み違えたことが、最終的に最も大きな問題であった。これは、普段の大会での成績などを考慮しているが、多くのトップ選手が一同に競うような大会が少なくなっており、必ずしも十分な情報が実行委員会内にはないのも事実である。近年、規定どおりにウィニングにすることが難しくなっており、総合的な解決がなされなければ、今後もウィニング設定からかけ離れた状態が発生することは考えられる。

#### リレー優勝時間設定

リレーにおいても男子コースが非常に短くなった。これもクラシックと同様の理由に夜が、感想率との絡みもあり、今回の結果の是非についてはさらに議論がなされるべきであろう。また、上位行での時間的な分散が少なく、男女とも最後までもつれる結果となった。これは本来のリレーの醍醐味であり、このような方向が維持されることが望ましい。

#### 男子 3 人制の議論

今回、競技会場に恵まれたこともあり、感想率、レース展開の点では、4 人制維持の場合の模範となる結果であったと考えられる。しかし、インカレの継続と言う意味では、今回 ME くらいスにでることができなかつた少人数の学校などを考慮すると、必ずしも 4 人制維持が望ましいことかどうかは、さらに議論の必要がある。

#### [3]改正実施規則と今後の再改正の必要性

本人カレ後の総会において、電子パンチングシステム関連など、現状に合わなくなつた部分を中心に実施規則の改正が行われている。本インカレにおいても、先取りできる内容は積極的に採用している。改正規則で、特に解釈の説明のある点は以下のとおりである。1) 女子の男子リレーの参加について、2) 男子リレーのウィニングについて、の 2 点であろう。1) は特に細分規定は設けていないが、規則 1.3 にあるとおり常識的な範囲でエントリーを行うこと。2) は（結果的に）今回程度のトップ 45 分（1 競技者）程度、チームトータル

200分強を想定した運用がなされる。

また、今回の改正では現状に合わない部分を苦不振に改正を行ったが、インカレの継続のための運営の省力化、協議の枠組みの変更など抜本的な改正を今後、早急に行う必要がある。

### 3. 運営全般を振り返って

運営の省力化（電子パンチングシステム、その他）

近年のインカレでは、参加者現象に伴う収入源により、運営経費の削減を余儀なくされている。理事会等での議論を受け、また東海地区での運営者確保の困難さもあり、今回のインカレでは運営者をじゅうらいより減らすための取り組みがなされた。その一つがSIシステムの導入である。

学生選手権の部でのEMITシステムの利用は3年目を迎えたが、今回初めて、学生一般の部、併設一般大会にSIシステムを導入した。千人近い参加者のゴール計時、タイム入力、失格判定といった作業を大幅に圧縮できる電子パンチングシステムはインカレにおいても有効であることが公開、証明された。SIの導入に当たっては多くの課題があったが、担当者たちが一つ一つ解決していた。なかでも、事前・当日の作業量を減らす目的で、リレーのチェンジオーバーをSIの受け渡しにより行うことを試みたが、なんとか順調にいったようである。

このほか、今後のインカレ運営の省力化に向けて、改善の余地がある事柄としては、「スタート地区レイアウトの工夫（スタート役員の削減）」、「試走結果の効率的な利用（試走のための交通費の節約）」などが挙げられる。

今後の課題（演出、式典、報道関係者への対応）

演出・式典については、ここ数年、経験が積み重ねられ、徐々に改良が進んでいる。今回は、中間ラジコンをむやみに増やさないなど情報量を厳選し、さらに中間通過タイムや正式ゴールタイムの伝達・計算・整理方法を改善した結果、従来より少ない演出スタッフでも、観客が満足できる放送・掲示になっていたと思う。また表彰式では、事前の入賞者召集確認をやめたことにより、速やかな開始、スムーズな式進行を実現していた。

今後の課題は、一般観客や報道関係者へのアピールである。インカレは、新聞社などの取材もあり、オリエンテーリングというスポーツをPRしていく絶好の場である。オリエンテーリングを知らない一般の観客にとっても分かりやすい速報刑事・放送、そして報道関係者が取材・撮影しやすい会場レイアウト・表彰舞台を作っていくことにも今後は力を入れていく必要がある。

### 4. 最後に

インカレにおける大会コントローラーの主な任務は、「インカレ実施規則が遵守されている

ことを確認すること」である。インカレにおいて実施規則が遵守されなければならないのは、実施規則が日本学連の石を反映し、総会でぎけつされたものであるからである。しかし、オリエンテーリングの永続的な普及・発展を考えると、インカレを取り巻く状況の変化に応じて、その実施規則も頻繁に見直しを行っていく必要がある。技術委員会では、その見直しの提案を随時行っていくが、学生のみなさん自身による真剣な議論も期待している。